とある出来損ないの英雄願望

youkey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある出来損ないの英雄願望

【Ｎコード】
Ｎ６２８５Ｒ

【作者名】
ｙｏｕｋｅｙ

【あらすじ】
かつて学園都市に夢を見てそして夢に破れた少年がいた。
それでも少年は夢にすがり正義にすがり続けた。
今日もまた少年はヒーローを夢見て街を行く。

※オリジナル主人公をメインに原作介入していくので苦手な方はご注意ください

1話　学園都市（前書き）

友人たちと話していて気分が盛り上がって書いてみました。

基本的にアニメ版にそって進みますが、漫画版と混ざった内容になると思います。

更新はかなり不定期になると思いますがよろしくお願いします。

1話　学園都市

ここは希望の街。

“おめでとう”

みんなが力を手に入れて夢を掴む場所。

“君には素晴らしい才能が眠っている”

少年の純粋な夢を叶えてくれる光溢れる場所。

“きっと超能力者（レベル5）にだってなれる”

少年はこの町で超能力者（ヒーロー）になれると希望に胸を膨らませていた。

「ん……。朝、か」

カーテンからこぼれる初夏の日差しに起こされた少年は日光から逃げるようにタオルケットをかぶって丸くなる。

「嫌な夢見ちまったな」

光を失う前の、ただひたすら夢を見ていた頃の記憶に顔をしかめつつも再び眠りにとこうとする。しかし、少年に安らぎは許されず枕元に置かれた目覚まし時計がけたたましく鳴り響いて起床を急かす。

「うるせぇ！　起きるか」

今時珍しい本物の鐘がついた目覚まし時計の金属音は寝起きの靄がかかった頭にガンガンと響いて睡魔の居場所を奪いつくし持ち主をたたき起こすという使命を完遂した。
ベッドから起き上がった少年は別れを惜しむ上瞼と下瞼を右手で擦って引き離すと、危なっかしい足取りで散らかった六畳間を横切りキッチンの冷蔵庫を開ける。

「えーと。げ、米切れてるじゃん。帰りに買ってこないと」

まだ幼いといっても過言ではない少年が自炊に積極的のはずも無く、冷蔵庫につまっているのはレトルトや出来合いの惣菜ばかり。
主食の米でさえレンジでチンのイトウのごはんに頼りきりの始末だ。
無いものを嘆いても仕方がないと、冷蔵庫からコロッケのつまったパックとコーラの５００ｍｌボトルを取り出すとコロッケをレンジに放り込みあたためスイッチを押す。
加熱が終わるまでに流し台に放置していた箸を軽く洗い、水気をふき取ると部屋の中心に置かれたテーブルからパソコンのキーボードをどかして作った食事スペースにコーラと共に並べる。
そこまでしたところで丁度よくレンジから加熱終了の知らせが鳴り、コロッケをテーブルの上に追加して朝食の準備が完了。
一人の食卓に暖かい挨拶も楽しい会話もあるわけも無くしばし咀嚼

の音だけが狭い部屋に漂っていたが、思い出したようにテーブルの横におかれたパソコンの本体の電源を入れると目の前の画面に明かりが灯る。

「どれどれ。世間はどうなってるかね」

いくつかのニュースサイトを同時に開き記事を読みながら食事を勧める。

第１０学区の研究室で１週間は消えないフェルトペンが開発されたとか、今日開店のクレープ屋で先着１００名にゲコ太ストラップをプレゼントだとかの生活に身近な情報は全て無視してチェックする記事は連続発火強盗や増加する能力者（がくせい）犯罪など物騒なものばかり。

「狙うのはやっぱり強盗だよな。ここら辺を荒らしてるみたいだし放課後は近くの銀行でも見回るか」

一日の行動を決めると箸を止めてその強盗に関する情報を集め始める。

犯人の人数から被害にあった店舗。逃亡に使われる道具など被害が続いたためにそれなりに情報は流れているが、規制がかけられているのか分かっていないのかどこのサイトも核心部分には触れていない。

「人数は三人。逃亡には爆弾を使ってシャッターをこじ開ける……か。となると最低でも発火能力者（パイロキネシスト）がいるな……」

限られた情報から推測を進めていくがすぐに煮詰まる。

情報が少ないのはもちろん、彼の能力で出来ることを考えれば対策も限られてくる。

「どうしたものか。ん？」

思考に没頭していた少年だが足元で震える携帯電話に現実に引き戻される。

デザイン性が低く折りたたみすら出来ない不恰好な携帯電話だが、防水や耐衝撃などに優れていてさらにはネット環境やワンセグ放送の受信、ＧＰＳ機能など様々な機能がついているが今震えているのは普通の携帯電話にもついているアラーム機能だ。

画面の端を見るとそろそろ家を出なければ学校に間に合わない時間になっていた。

「やべ、急がないと」

すっかり冷めてしまったコロッケを頬張りコーラで流し込み立ち上がる。

寝巻きを脱ぎ部屋の隅の洗濯物がたまったスペースへと放り投げるとパンツ一枚の格好でタンスを開ける。

タンスの中には安物の下着と似たようなデザインのジャージばかりで悩むことも無く赤い無地のＴシャツと黒いジャージを取り出し手早く着替えを済ませる。

空になったペットボトルとコロッケのパックをゴミ箱に、箸は流し台にそれぞれ入れて床に放置されていた鞄を肩にかける。

窓に鍵が掛かっているのを確認し、財布などの貴重品を持ったことも確認。

全て終わると台所のすぐ横の玄関でごついスニーカーを履き誰も残らない部屋を後にする。

団地のように並んだ同じ外観の学生寮の一つから少年が出ると、そ

とはすでに様々な制服を来た子供たちの群れがそれぞれの学校へと登校している。
少年も自然とその中にまざり自分の学校を目指す。
歩くほどに人の数は増えていくが不思議なことにその殆んどは学生服を着ていて、そうでない者も十代後半から二十代前半と若い。つまりは学生しか歩いていない。
いや、学生に混じって自走するドラム缶のようなロボットも数台いるがそれでも異様な光景であることに変わりはないがそれを不思議に思う者はいない。

それもそのはずこの町は“学園都市”。

東京都の西部を切り開いて造られた研究都市で、厳重なセキュリティに守られたこの街の内と外では二十年は科学技術の進みに差があると言われるほど。
そしてその技術の中でも特に有名なのが“脳の開発”だ。簡単に言ってしまえばここは街ぐるみで超能力の研究をしているのだ。
その研究も記憶術や暗記術などの名目で学校の授業に組み込まれているため多くの教育機関が存在し、人口の約八割を学生が占めていることが名前の由来だ。

「うーいーはーるーん♪」

一年以上も歩いた通学路に今さら思うことも無いのでぼんやりと今日の身体検査（システムスキャン）だるいなー、などと考えていた少年の耳に明るい少女の大声が届き何事かと視線を向ける。

「おっはよーーん！！」

理想郷（パラダイス）がそこにはあった。

（淡いピンクの水玉か……。いいもん見れた）

頭にたくさんの花飾りをつけた理想郷（パラダイス）の主とその理想郷（パラダイス）をこの世にひっぱりだした黒髪セミロングの英雄とがなにやら言い合っているが少年には関係の無いこと。

もう一度なんて美味しいことがあるとも思えないのでさっさと立ち去ろうとするがこの世に神はいた。具体的にはたったいま英雄が再び理想郷（パラダイス）をこの世にもたらして少年の中で神に昇格した。

（オッシ！　今日はなんだかいいことある気がする！）

先ほどまでの無気力から一転。若者らしい活力に満ちた顔と覇気のある足取りで進む通学路は何故かこの一年以上の通学で一番輝いて見えたとか。

その輝く通学路もすぐに終わりを向かえ少年が通う学校“柵川中学”の校門をくぐる。

学園都市には科学の最先端の名に相応しく不気味なほど真っ白く得体の知れない機械が溢れる病院か研究所のような学校や、絵に描いたようなお嬢様学校まで異様なほどのヴァリエーションを誇るがこの柵川中学は学園都市の外と比べても平均的な普通の学校だ。

「おはよー」

少年が所属する二年C組の扉を開き、朝の定例文句と共に自分の席

へと歩みを進める。
何人かの友人たちと挨拶を交わしつつ携帯電話をネットに繋ぐ。
（例の発火強盗に対する続報はなし。ん、爆弾魔？　能力を使った爆弾でついに風紀委員（ジャッジメント）に被害か。他に情報は――）
「お前ら席に着けー」
新たな事件に興味を引かれ調べを本格化しようとした矢先にやってきた教師の言葉に遮られる。
このまま続けても携帯電話を取り上げられて時間を無駄にするだけなので電源を切ってポケットにしまう。
「忘れてないと思うが今日は身体測定（システムスキャン）があるからなぁ。自分の測定時間忘れるなよ。それから――」
一学期の終わりも差し迫ったこの時期には大した授業もなく、あるのは中身の無い消化授業とこの数ヶ月の成果を見せる身体測定（システムスキャン）ぐらい。
この測定では各能力別の様々な計測を行い有効範囲、精度、強度などから能力の強さ（レベル）を決めるこの行事は能力で学生の扱いに差がでるこの都市では学生たちにとって今後の生活を左右する一大事。
なのだが、中学二年にもなると能力の伸び悩みが目立ち始め対外の生徒にとっては面白くも無い、むしろ落ちこぼれの烙印を押されかねない忌むべき日といっても過言ではない。
「ん～～～！　星？」

「波だ。次」

色々な図形が描かれたカードを掲げる教師の前で頭から湯気が出るほど力んだ生徒が図形を言うがまったく当たらず溜め息をつかれる。

「はー、正解率一割以下。無能力者（レベル０）」

無能力者（レベル０）。全学生のうち約六割が分類される強さ（レベル）で、一部例外を除けばまったく無いということはないが目に見えて何かが出来るわけでもない落ちこぼれと言われる者たち。

「えーーと、これで」

分度器の前に金属の板がついた謎の計測器の前で両手をかざした生徒が眉間に皺をよせて力を込めると徐々に板が曲がり始める。

「ん。誤差－２．３。。低能力者（レベル１）」

低能力者（レベル１）。多くの生徒が属するこの強さ（レベル）から目に見えるほどの効力を持つが、何かに役立てるのは難しい。

「１０５９……７？」

「惜しいな。１０５９１だ」

机に伏せられた紙に手を合わせた生徒が自信なさ気に裏に書かれた

数字を読み上げるが、一つだけ間違えてしまい教師もその結果を記入する。

「精度三割弱。異能力者（レベル２）」

異能力者（レベル２）。低能力者（レベル１）に比べれば随分と威力も上がってきたがまだまだ日常では約に立たない。

「むむむ」

「ふむ、コレは我輩は猫であるか」

白いカバーが掛けられ中身が分からないようにされた本を読む生徒が唸りを上げるとカーテンで仕切られてすぐ隣に居る教師がその本のタイトルを当てる。

「伝達力よし。強能力者（レベル３）」

強能力者（レベル３）。ここからようやく日常において有効性が出始める強さ（レベル）でエリート扱いなどの特別視をされ始める。

柵川中学には強能力（レベル３）の能力者までしかいないがこの学園都市にはまだ上が存在する。

たとえば大能力者（レベル４）。生身ながらも軍隊において戦術的価値を見出されるほどの能力。大型のトラックを吹き飛ばす空力使（エアロハンド）

いや俗に瞬間移動と呼ばれる空間移動（テレポート）など個人でも相当の脅威と成るほど。

そして、超能力者（レベル５）。学園都市において七人しか存在しない能力者の頂点。その力は軍隊にも匹敵するほどで、艦載兵器である超電磁砲を射出するほどの能力者まで存在する。

それほどの可能性を秘めた子供たちが集うこの街の学校に在籍する少年もまた数年間に渡り鍛えられた能力――――。
“自分だけの現実（パーソナルリアリティ）”を試される。

「次、緋色（ひいろ）　青磁（せいじ）能力測定開始」

「おう！」

名前を呼ばれた少年、緋色青磁は測定器に手を向けて目をつぶり精神を集中する。
ゆっくりと深呼吸を一つ、数秒の沈黙の後に目を見開く。
そして注ぎ込まれる緋色の全力の能力。
僅かずつ震える計測器。その振動は徐々に大きくなり彼の強さ（レベル）を示す。

熱く眩しい午後の日差しのしたを緋色は先ほど受け取ったばかりの身体測定（システムスキャン）の結果を眺めながらのんびりと歩いていた。

「異能力（レベル2）か。やっぱもう戻らないのかね」

苦虫を噛み潰したような顔で芳しくない数値が記された紙を睨みつける。

その目にこもるのは諦めと僅かばかりの憎しみ。

立ち止まって暑さも忘れたようにしばし物思いにふけった緋色だが、強さ（レベル）など個人ではどうしようもないことだと頭を振って思考と視線を前に向ける。

「ええと、まだ被害にあってない銀行がこの辺に」

鞄から取り出したメモ帳には彼がニュースをまとめた連続発火強盗の情報がびっしりと書き込まれている。

その中の簡易な地図には強盗の被害にあった店舗がいくつも記されていて、近隣の学区の銀行がたて続きに襲われている。

そのことから緋色はまだ無事なところに強盗が来るのではと考え学校終わりの炎天下のなか真っ直ぐにやってきたのだ。

「あった！　て、閉まってるのかよ」

なかなか見つからないと思えば目当ての銀行はシャッターを閉めていて営業をしている雰囲気ではない。

時間的にはまだ閉店には早すぎるがそこはそこ。創業記念日とかシステム保全とかいくらでも理由は思いつく。

無駄足に終わったと分かると今まで気にしていなかった暑さが一気に体を襲う。
そして道路を挟んで向こう側にある広場に魅力的な自販機が在るのに気がつけば財布を取り出しながら惹きつけられるのは人の性と言えるだろう。

「新製品コキャ・コーラフィッシュ。脳の発育にも必要なドコサヘキサエン酸をたっぷりと含んだ青魚テイストのこれからの子供たちのための炭酸飲料……」

ハズレだ。絶対にハズレだと分かる。開発担当のクビが飛ぶくらい確実なハズレだ。
それでも緋色の手は財布をしまわない。それどころか小銭入れを開いている。
悲しいかなコーラフリークとしての冒険心が当たって砕けろと言ってやまない。
殉教者のごとき穏やかな表情で投入される一枚の百円玉と二枚の十円玉。
灯るランプ。今なら引き返せる。となりの普通のコーラを買ってもいいし、おつりのレバーを使ってもいい。
だが、それでも人差し指は迷うことなくハズレ商品のボタンを押し込む。
音を立てて落ちてくるコーラフィッシュなる新商品。受け取り口から取り出したところで激しい後悔が襲うがもう遅い。

「いくか」

覚悟を決めてプルタブに指を掛けたところで全身を震わす爆音が辺りに鳴り響く。
多くの悲鳴が木霊するなか緋色の目はさきほどの銀行に吸い込まれ

る。

（シャッターが閉まってたのはそういうことか）

休業日な訳ではなく彼の予想通りに強盗が来ていたのだ。
未だに黒煙を上げるシャッターの大穴から飛び出してくる三人の男。
情報の限りならば一人は発火能力者（パイロキネシスト）。
放っておいてもすぐに風紀委員（ジャッジメント）か警備員（アンチスキル）がやってくるはずだ。一般人の彼には手を出す権利も義務もない。だが――――

「ヒーローなら行かなきゃな」

緋色の手にはコーラ一缶と鞄が一つ。それに不適な笑みを浮かべて逃げる強盗たちへと歩みを進める。

1話　学園都市（後書き）

誤字脱字、および原作知識に対する間違いなどありましたら遠慮なくご指摘ください

2話　ヒーロー（前書き）

書き溜め終了です。次はかなり遅くなると思いますが力の限り頑張ります

2話　ヒーロー

「ヒーローなら行かなきゃな」

突然の爆発に混乱する民衆の間を掻い潜りながら緋色は逃げようとする強盗目指して駆けるが、そんな彼の腕を掴む少女が。

「危険ですから一般の方は広場から出ないでください」

「あ、理想郷（パラダイス）の」

頭に大量の花飾りをつけた理想郷（パラダイス）の主こと“初春（ういはる）　飾利（かざり）”の腕には学園都市の治安維持のために学生の中から有志を募り、厳格な審査と厳しい研修のすえに選出された風紀委員（ジャッジメント）の証たる盾をモチーフにした腕章がつけられている。

もちろん初春のほうはには緋色に見覚えなどなく「え？　理想郷（パラダイス）？」

「いやいやこっちの話だよ」などと、どうでもいい会話をしながらも歩みを止めずにズルズルと引きずっていく。

「風紀委員（ジャッジメント）ですの！　器物破損および強盗の現行犯で拘束します！」

緋色がグダグダしている間にツインテールの風紀委員（ジャッジメント）“白井（しらい）　黒子（くろこ）”が強盗たちのもとに駆けつけ声高に宣言する。

実際には命の危機もあるため風紀委員（ジャッジメント）にはそこまでの権限はないのだが、一般人はそんなに詳しい事情は分からず強盗たちも思わず立ち止まる。

しかしそれも一瞬。白井の姿を見た強盗たちから笑いが上がる。

無理もない。屈強とは言いがたい、むしろ華奢な女の子が一人で拘束するといっても冗談か強がりにしか聞こえない。

（まずい。早くいかないと解決されちまう）

この強盗を期待してやってきた緋色が強引に初春を引き離そうとするが、そのとき広場から出て行こうとするバスガイドが目に入った。

「おい。あの人あぶないんじゃないか？」

「え？　あ！　ダメですよ広場から出ちゃ！」

指摘されてバスガイドに気がついた初春はすぐに飛んでいって引き止める。

それで開放された緋色は強盗へと急ぐがすでに一人が白井に襲いかかろうとしている。

「おらお嬢ちゃん。とっととどっか行かないと――」

（間に合えよ！）

肥満気味の大男が腕を伸ばしても白井は焦るどころか余裕すらある表情で自分から近づいていく。風紀委員（ジャッジメント）として格闘訓練も受けている彼女にすれば突っ込んでくるだけの大男など格好の的でしかない。訓練通りに腕を避け、その腕を引きこみつつ足を払う。白井はそう思っていたのだがそこで予想外のことがおきる。

空気の抜ける音と同時に大男へと真横から降りかかる泡立つ飴色の噴水。

量こそ少ないが場の雰囲気を壊し、男の歩みを止めるには十分なその噴水の源に視線を向けるとコーラの缶を男に向けている黒いジャージの少年、緋色が獲物を見つけた狩人の笑みで立っている。

「女の子相手に粋がってるんじゃねぇぞ」

「だったらテメェから先にぶっ殺してやるよ！」

気持ちが高ぶっていたところへコーラを吹きかけられた上に舐めたことを言われた大男が怒りに身を任せて攻撃対象を緋色へと変える。拳を振りかぶって走ってくる大男に対して左手をかざした状態で棒立ちの緋色。

今さら恐怖で足がすくんだのではない。精神を集中するために無防備な姿をさらしているのだが、そのことに気がつかない大男は嗜虐的な表情でさらに近づく。

（今だ！）

大男との距離があと3メートルを切った辺りでそれは起こった。微かに耳に届いた重低音。大男はそれに気がつく間もなく前のめりに倒れる。

「うを！　な、なんだ足が！」

倒れた大男が急に動かなくなった自分の脚を見ると先ほどコーラをかけられたジーパンが凍り付いて拘束具のようになっている。

「まさかお前、能力者！」

「だったらどうした！」

倒れたまま身動きがとれない大男の肩めがけて緋色はサッカーボールをそうするように大きく振りかぶって蹴りを繰り出す。

それが当たった瞬間、大男から声にならない悲鳴が上がる。

強盗をやるような荒くれ者が中学生の蹴り程度でそこまで痛みを訴えるはずがない。しかし、ただの中学生の蹴りでは在り得ないことに肩は僅かに陥没していて骨に異常をきたしているのが見て取れる。緋色の蹴りはそこまで強力なのか？　答えは否だ。
その秘密は彼の履く靴にある。一見すると普通よりも一回り大きく無骨なデザインのスニーカーだが、実はこれはつま先に鉄芯を入れてある安全靴と呼ばれるものだ。
本来は工事現場や工場などで重量物の落下から足を守るための保護具なのだが、ひとたび喧嘩に使えば人を殺しかねない恐ろしい凶器へと変身をとげる。
運動能力が未成熟な中学生の異能力者（レベル２）が犯罪者と戦うために考えた浅知恵に過ぎないが、外見で彼を舐めていた強盗には効果的面だった。

「糞ガキが、今さら後悔しても遅せぇぞ」

仲間がやられたことに怒りを覚えつつも緋色が能力者と知ったリーダー格の男は距離をとったまま右手に意識を集中させる。するとその右手から炎が上がりハンドボールほどの大きさで安定する。

「わざわざ触媒（コーラ）なんて使ったてことはテメェは凍結能力者（フリーズユーザー）の異能力（レベル２）程度か。強能力（レベル３）の俺の炎は凍らせられないだろ！」

盾にするように炎を前に突き出して男が緋色に迫る。
よほど高レベルの能力者か、特殊な能力でない限りは大抵の能力は能力者を起点として発動する。緋色もその例に漏れずに自分から直線的な位置にしか力を働かせられないのでこの防御法は大正解だ。

（もっとだ。もっとひきつけて）

消せないと分かっていても左手を向けて力の限り凍結させようとするが、それでも炎が一回り小さくなったかも程度。
ついに炎は消えることなく、あと数歩で男の手が緋色に届こうという距離。
緋色は左手に添えていた右手も男へと向ける。
緋色が右手に意識を集中させると耳障りな高音が僅かに聞こえてくる。それと同時に男の手に灯る炎の勢いが増すが、本人はそれに気が付かない。

「消し炭にな、うわ熱ちぃ！！」

男の能力を上回るほどの火力になった炎は生みの親に襲い掛かり、思わず能力を解除して歩みを止めてしまう。

（これで、俺の勝ちだ！）

左足を捻り、掲げていた右手を振り下ろして体を捻りながら右足を振りぬく。
それで男の腕をへし折って勝利だと確信した緋色が蹴りの体勢に入ったところで元々この男たちと対面していた白井がやってくる。
いや、やってくるというのは正確ではない。白井が男の後ろの何もない空中へと突然現れた。

「自分の能力も制御できないとは、怠惰にもほどがありますわ」

白井は現れたときには曲げていた足を落下の勢いに載せて力いっぱい伸ばして男の後頭部へとドロップキックを叩き込む。
男が蹴り倒されると白井は落下する前に姿を消して今度は男と緋色の間へと現れる。

白井は油断することなく男から目を離さずに素早く自分のスカートの下の太ももに隠したホルダーに挿してある金属矢（ダーツ）を手で撫でていく。
するとその金属矢（ダーツ）は先ほどの白井と同じく姿を消すと倒れた男の服の端々に突き刺さるように現れると男を地面に縫い付ける。

「空間移動能力者（テレポーター）！？」

そう、離れた場所へと一瞬にして移動しさらには物体や他者さえも跳ばす力“空間移動（テレポート）”。学園都市でも僅かに５８人しかいない空間移動能力者の一人が白井黒子だ。
男がようやく自分との格の差を理解したことに満足したように白井は上品な笑みを浮かべながら最後通告を告げる。

「これ以上抵抗なさるなら次は金属矢（これ）を、直接体内に空間移動（テレポート）させますわよ」

これ以上ない脅し文句に男は唸りながらも白旗を振る。それを確認した白井は表情を一転させて険しい顔で緋色に向き直る。

「さて、次はあなたですが。学園都市の治安維持は風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）の管轄だということはお分かりで？　権限のない学生が無闇に手出ししますとこちらも暴行罪で拘束しなくては成りませんのよ？」

緋色は顔をしかめるが、それは白井の正論過ぎる説教に対するものではなく強盗への止めを奪われたことに対してだ。
元より自分から強盗を捕まえようというのだから学園都市の正義の象徴とも言える風紀委員（ジャッジメント）を目指したこともちろんある。
しかし、研修の途中で風紀委員（ジャッジメント）には逮捕権などはなく、仕事の大半は校内の治安維持と学区内のパトロール、道案内、掃除、探し物な

どなど雑用ばかり。事件現場に出動すれば避難誘導や怪我人の手当てと警備員（アンチスキル）の下請けのようなことだけで実際に犯人と向き合うことも出来ないという事実を知って途中で研修を放り出した過去を持っている。
だからこそ思う。自分も越権行為を行いながら偉そうに説教たれるなと、なんとも勝手なことを思いながら未だに続く白井の説教を聞き流す。
二人とも完全に意識から忘れてしまっているが強盗は“三人組み”である。
それを思い出させるように最後の一人が大きな声を上げる。

「なんだよお前！　離せよ！」

二人が慌てて視線を向けると細身の男が小さな男の子を人質にしようと腕を掴み、今朝の通学路で初春の理想郷（パラダイス）を衆目にさらしていた黒髪の少女“佐天（さてん）　涙子（るいこ）”がさせまいと男の子を抱きしめて守っている。

「くそ！」

二人を連れては逃げられないと人質を諦めた男が悪態をつきながら佐天を蹴り飛ばして逃走用に用意していた車に乗り込む。

「黒子！」

初春が佐天を心配し叫び、白井と緋色がそれぞれの能力で車を止めようとするがそれを遮る新たな人物の声。
青白いスパークの光を纏った茶色いショートヘアの少女。

「こっからは私の個人的な喧嘩だから手、出させて貰うわよ」

その姿を見た瞬間に緋色の頭にある単語が走る。それは強盗のリーダーも同じだったらしく驚愕の声を上げる。

「思い出した！　風紀委員（ジャッジメント）には捕まったが最後、心も体も切り刻んで再起不能にする最悪の腹黒空間移動（テレポーター）能力者がいると言う噂！」

リーダーの男のいいように白井が頬を引きつらせるが、緋色はその噂を思い出しコイツのことだったかと白井に好奇の視線を向ける。

「それだけじゃねぇ！」

男が言葉を続ける間も車に乗り込んだ仲間はアクセルを吹かして大急ぎで逃げていこうとする。

「その空間移動（テレポーター）能力者を虜にするあの最強の電撃使い（エレクトロマスター）……」

ギャラリーの盛り上がりもよそに茶髪の少女は逃げる車に向かって右手を構える。

その右手から空高く弾かれる一枚のコイン。

「そう、あの方こそが学園都市２３０万人の頂点――」

男の言葉を引き継いだ白井がまるで自分のことを誇るように、それでいて少女を称える言葉を紡ぐ間にもコインはゆっくりと落下してくる。

「七人の超能力者（レベル５）の第三位――」

少女の元に返ってきたコインはほとばしる電撃を吸収して砲弾へと

変貌をとげる。
静かに、それでいて確かな怒りを顔に浮かべながら少女はその砲弾を指で弾き車へと打ち出す。
「『超電磁砲(レールガン)』“御坂(みさか)　美琴(みこと)”お姉様」
コインは空気の摩擦で灼熱しオレンジ色の光の帯となって車の後輪に突き刺さる。
その威力のあまりに着弾の衝撃で小規模な爆発が起こり車は吹き飛ばされ仰向けの状態で落ちてくる。
「常盤台中学が誇る最強無敵の電撃姫ですの」
心酔したように瞳を潤ませながら白井が言うが、緋色が御坂を見る顔にはあまりいい感情は感じられない。
無表情ながらも僅かに細められた目に篭るのは嫉妬、嫌悪、怒り。
どれとも取れるが、まだどれとも断定できないほど小さなものだが確かに緋色の胸の奥に黒い感情が芽生えていた。
強盗たちを白井が携帯していた手錠で拘束していると教員たちの有志から成る耐能力者戦用の武装を装備した治安維持組織“警備員(アンチスキル)”

が到着し怪我人の救助や瓦礫の撤去、犯人たちの護送車への収容など瞬く間に事件は収集していく。
それを確認した緋色がそろそろ帰ろうかと思っていると飴玉を転がすような甘ったるい声で呼び止められる。

「あ、あの」

振り返れば初春が恐縮したようにおどおどとしている。
一瞬なんの用かと疑問に思う緋色だがよく考えれば彼女も風紀委員（ジャッジメント）だ。ならば用件など一つしかない。

「犯人逮捕にご協力ありがとうございました！　ですが、あの……」

そこで言いよどむ初春。まったく非はないのに遠慮してしまう彼女の様子は風紀委員（ジャッジメント）とは思えず、面倒なことになる前に逃げようという考えが馬鹿らしくなってくる。

「暴行罪だよな。分かってるよ」

「そ、そんな暴行罪だなんて！？　何とか過剰防衛でいけますよ！　諦めないでください！」

前科が付いてもいいかな？　と、どうでもいい緋色と少しでも罪を軽くしようと知恵をめぐらせる初春。普通は立場が逆だがそのことを意識して緋色から笑いがこぼれる。

「分かったよ。よろしく頼む」

「はい！　任せてください！」

意気込む初春に伴われて警備員（アンチスキル）に出頭する緋色。
アレだけのことをしておきながらもう強盗など意識から外して佐天に手を差し伸べる御坂と背中合わせになった彼の姿はまだまだヒーローには程遠かった。

2話　ヒーロー（後書き）

誤字脱字、および原作知識に対する間違いなどありましたら遠慮なくご指摘ください

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6285r/

とある出来損ないの英雄願望

2011年10月7日22時21分発行